

JICA国際協力中学生・高校生 エッセイコンテスト2014

北海道優秀作品集

JICA国際協力エッセイコンテストに多くのご応募を頂き、誠に有難うございます。また応募に際しては、各校の先生方及び関係の皆様に多大なご支援を頂き、厚く御礼申し上げます。

国際社会では中進国の発展が進み、アジアが世界経済の牽引役となる一方で、アフリカを中心に格差の拡大、環境問題などが依然として重要な課題として残されています。日本国内においても、少子高齢化、人口減及び過疎化は全国的な課題となっており、全国各地域の振興や活性化に向けた取り組みが喫緊の課題として挙げられています。

中高生の皆さんのエッセイを拝読すると、途上国の開発や道内の活性化のために自分に何ができるのか真剣に考えている様子が分かり、我々としても国内外の課題に対してより積極的に取り組む必要性を再認識しているところです。

JICAは本コンテストを単に中高生の皆さんの個人的意見発表の場とするのではなく、一般の皆さんも国内外の諸課題を考え、ご自身に何ができるのかを考える機会として活用願いたいと考えていますので、今後とも沢山のご応募をお待ちしています。

2015年5月

独立行政法人国際協力機構(JICA) 北海道国際センター所長 松島 正明

【2014年度テーマ】「つながっている、世界と私－未来のために私がしたいこと－」

【北海道応募数】中学生の部1,286名(全国37,669名)／高校生の部3,124名(全国28,793名)

【北海道入賞】中学生の部9名、学校賞10校／高校生の部21名、特別学校賞4校、学校賞8校

たくさんのご応募、ありがとうございました。

受賞者一覧

P2 文部科学大臣奨励賞

笹森有穂(北海道札幌南高等学校)

審査員特別賞

鬼原明日香(北海道札幌国際情報高等学校)

P3 国際協力特別賞

大谷優生(海星学院高等学校)

P4 北海道国際センター所長賞

日高孝子(石狩市立樽川中学校)

荻野玲華(北海学園札幌高等学校)

P5 佳作

瀬口まりな(札幌光星中学校)

土屋七海(函館市立五稜中学校)

P6

大澤佑輔(函館ラ・サール高等学校)

P7

齊藤和花(北星学園女子高等学校)

P8

庄司万葉(北海学園札幌高等学校)

P9

畠村汐音(北海学園札幌高等学校)

山田穂乃花(北海学園札幌高等学校)

小林詩織(北海道札幌国際情報高等学校)

P10 土屋花(北海道札幌西高等学校)

P11 清水美音(北海道札幌東高等学校)

福井菜央(北海道滝川西高等学校)

P12 大原千明(北海道留辺蘂高等学校)

P13 青年海外協力隊北海道OB会長賞

佐野凪未(旭川市立愛宕中学校)

高橋紗英(石狩市立樽川中学校)

磯山大河(札幌市立西岡中学校)

小田切宏太(北海道手稻養護学校)

P15 須貝くるみ(釧路町立富原中学校)

小本乙乃(更別村立更別中央中学校)

追久保佳奈(北海道旭川商業高等学校)

P16 白幡咲紀(北海道旭川商業高等学校)

P17 川原亞弓(北海道剣淵高等学校)

飯塚麻友(北海道札幌清田高等学校)

P18 佐部田智華(北海道札幌西高等学校)

中田結依香(北海道札幌西高等学校)

十亀遙(北海道留辺蘂高等学校)

文部科学大臣奨励賞

未来への投資

北海道札幌南高等学校 2年
笹森 寿穂

夏休みに、カンボジアのある教育支援団体の方と一緒に現地の中学校と学生寮を訪問する機会があった。私はこの見学をとても楽しみにしていた。中学生の時にこの団体のボランティア活動に参加した経験があったからだ。書き損じハガキを集めて送ると、換金されて奨学金として子供たちの学費に役立てられるというもので、生徒会長として学校全体で回収活動を展開したのだ。私たちの取り組みでは一年間で二人の子供が学校に通うことができたということだった。

しかし、現地で職員の方のお話を聞くうちに、私の頭の中に小さなわだかまりが生まれた。通学できるようになっても、家庭の人手不足や留年制度により退学せざるを得ない子が後を絶えず、奨学金も子供の数に対して不足している。支援は不十分どころか全く足りていなかったのだ。

訪問した寮は、木と木の皮を組み合わせて作った簡素な建物で、中学生たちが共同生活していた。家から学校まで二十キロ近く離れており通学が困難なため、親や先生が学校の隣に建てたものだという。十二の小学校から生徒が集まっているが、それでも家からの距離が遠く三割の小学生が中学校へ進めず、進学先の高校はさらに十キロ先にあり、この中学生たちが高校に通うのは難しいそうだ。

わだかまりはますます大きくなっていた。奨学金は足りておらず、もうことができても学校が家から遠いという理由で進学できない。何もできずに独りよがりの達成感に浸っていたのだと気付かされ、自分が恥ずかしくなった。活動の成果を見られると思っていたが、逆に自分が取り組んだ活動を否定されたような気さえした。

私は考えた。自分のような高校生にできる小規

模な支援ではほとんど効果はないのではないか。少しばかり支援しても改善が見込めないのなら、小規模な支援をする意味はあるのだろうか。高校生の私に大規模な支援を行うことは不可能だ。私には現地に学校を建てる事はできない。何をすれば高校生の自分が効果のある支援をし、役に立てるのか。どうすればよいのかわからなくなってしまった。

わだかまりを抱えたまま帰国して数日後、私は現地でとったノートをぼんやりと見返していた。その時、あの団体の方の言葉が目に入った。
「Education is investment.(教育は投資である。)」

たった一行だったため正確な意味はわからないが、私は「今すぐに教育環境が劇的に改善する望みはほとんど無い。けれど、将来、教育のみならず国全体を変えていくような人材を育てるための支援ができる。私たちはカンボジアの未来に投資しているのだ。」というふうに解釈をした。

一気にわだかまりが消えた。私には現地に学校を建てる事はできないし、子供を何百人も学校へ通わせることもできない。しかし、仲間と協力すれば何人かの子供に学校にいくきっかけを与えることはできる。支援を受けた子供たちが成長し、国をリードしていくような存在になれば、私たちの支援は何十倍・何百倍にも増幅されるはずだ。ハガキ回収など、はじめの一歩は小さくても効果を増幅させられる「小さな投資」こそ、今の自分にできる最善の支援だと思う。

今振り返ってみると、これまでボランティア活動に取り組んだり、協力したりするとき、自分の活動の意味について考えていなかった。しかしこれからは違う。募金をするとき、物資を提供するとき、自分が誰かの役に立っているというだけでなく、この小さな行動が今後どれだけ増幅されるだろう、どんな広がりを見せてくれるだろうと未来に目を向けたボランティアができるようになった。ハガキ回収活動もそうだ。たとえ一年に二人しか学校に行かせてあげられなくても、それは立派な「カンボジアの未来への投資」なのだから。

審査員特別賞

夢に向かって

北海道札幌国際情報高等学校 3年
鬼原 明日香

この間、テレビで夏川りみさんの「花」が流れていった。その時突然、強烈に一年前の記憶が蘇った。

私は去年の夏休みにスタディーソーでラオスを訪れた。そこで私たちは不発弾処理センター、障害者施設、いくつかの施設を訪問した。たくさんの学びがあった中で私が最も鮮明に覚えているのが、訪問先の「ラオスのこども」というセンターで出合った

子どもたちのことだ。言葉が通じない分、汗だくになり体当たりで交流した。その中でも、ノイという私と同じ年くらいの女の子とは何故か気が合い、まるで前から知っていたみたいにすぐに仲良くなり、二日間一緒に過ごした。一緒に紙飛行機を折ったり、お互い片言の英語でおしゃべりしたり、当たり前のようにいつも一緒にいた。楽しかった二日間が終わり、お別れの時、センターの子どもたちが私たちのために歌を披露してくれた。その歌が夏川りみさんの「花」という曲だったのだ。ノイたちが慣れない日本語で一生懸命歌ってくれる姿を見て、涙があふれ出してきた。そして、この時もノイは一緒に歌おうと私を引っ張り寄せて、2人で号泣しながら歌ったのを今でも鮮明に覚えている。ノイと過ごしたのはたったの二日間だけだったが、この時からノイは私の大切な親友になった。

そんな体験をしてからもう1年。私には将来の夢ができた。教育を受けられない子どもたちに勉強を教えるという夢だ。ラオスのNGO団体のホームページを見てみると、ラオスでは教育の普及・改善に取り組んでいる。しかし、教室数・教員数の絶対的不足、教員の質の低さや、教科書不足など依然として多くの課題があり、地方・農村部においてはより深刻な状況にあると書いてあった。

そんな子どもたちのために私だからできることをしたい。また、ラオスの子どもたちと一緒に遊んだ時のくしゃくしゃの笑顔、お手伝いしている時の真剣な顔が忘れられない。そんな子どもたちと一緒にいると今まで幸せになれたからだ。

先日、思い切って私の夢を両親に話してみた。すると、思わず答えが返ってきた。「向こうで紛争や事件に巻き込まれたらどうするの?」「もし、病気になってもすぐに治療できないんだよ。」さらには「一人娘をせっかくここまで育ててきたのに、そんな危険なところに行かせたくない。」そう言われて、私の心はペシャンコになり、どうして私の夢を応援してくれないので?と心の中で叫んでいた。私は最近まで客室乗務員になりたかったのだが、その夢を身長が足りないという理由であきらめた。両親は落ち込んでいた私に、そのままの明日香でやりがいを持てる仕事がきっと見つかるよ

と言ってくれていたのだ。なので、やっと見つけた新しい夢をまさか反対されるとは思っていなかった。確かに両親の気持ちを考えてみると親不孝なのかもしれないが、夢をあきらめたくない。しかし、このままでは私の思いは両親には伝わらない。独りよがりのままだ。これから私を見てもらい、私の思いを分かってもらうしかない。まず、大学で私はタイ語を勉強すると決めた。日本にはラオス語を学ぶ大学が少ない。ラオスはあらゆる面でタイの影響が色濃く、言語の共通点も多いのだ。同時に、夢に近づく具体的な方法を探し、自分には何ができるのかも大学四年間で見つける。そしてタイ語を習得し、その答えが見つかった時こそ、もう一度両親に向き合う時だ。自分の夢は生半可なものではないこと、子どもたちと一緒にいると自分で幸せになれる事、ありのままの私でやりがいを持ってしたいことなのだとということ。これらの自分の思いを両親に話そう。

一年前の私は高校生の訪問者としてラオスを訪れ、ノイと出会った。次は、スキルを持った少し大人の私になって、ラオスに戻る。ノイ、待っててね、もう少しだけ…。

国際協力特別賞

微力だけど無力じゃない

海星学院高等学校 1年
大谷 優生

私は中学生の頃、生徒会役員としてカンボジアへの国際協力を行った。きっかけは私の地元にカンボジアで小学校を建設している団体があることだった。募金活動に多くの生徒に協力してもらいたいと強く思い、ポルポト時代に虐殺が起こったことや、それによって教師や学校が不足していることについて調べてまとめた。しかし、ずっと心の中に引っかかっていたことがあった。調べた内容があまりにも想像できないものであり、現地の人たちが何を考え、どんな生活をしているのかわからなかつたことだ。顔の見えないインターネットの世界で見つけた話は、全校生徒に話せるほど信用していいものなのかもわからない。もし私がカンボジアへ行ったら、皆にもっと詳しい話ができるかもしれない。いつしか私はカンボジアに行きたいと思うようになった。そんな思いを抱えながら私は高校生になり、カンボジアへ行く機会に恵まれた。

現地で日本のNGOが運営する養護施設を訪れた。そこでは、三~十九歳の子どもたちが一緒に暮らしている。彼らは施設から学校へ通い、施設で日本語の勉強もしている。だから私たちに日本語で挨拶をし、将来の夢や好きなことについて話してくれた。学校の先生になりたい、車のデザインをしたい、絵を描くことが好き。彼らは私たちに嬉しそうな笑

顔を向けてくれた。また、私たちのために日本語で歌も歌ってくれた。彼らが私たちを歓迎してくれたことが嬉しくて、思わず涙が溢れた。その後は一緒にお菓子作りをした。慣れない作業が多く、戸惑う私にお手本を見せ、付き添ってくれた。そのお礼に彼らが歌ってくれた歌を歌うと、一緒になって声をそろえてくれた。彼らは私の手を引き遊びの輪の中へ入れ、現地の遊びを教えてくれた。それから彼らが大好きだというサッカーも一緒にした。年齢や性別に関係なく円になりボールを蹴ったあの時間に彼らと私の心はつながったと思った。私は彼らから、思いを伝えようとする気持ちの大切さ、笑顔は人と人をつなげること、歌は世界共通であることを教わった。

だが、彼らから教わったことはそれだけではなかった。私に満面の笑みを浮かべてくれた彼らには、カンボジアの歴史によって背負わされた悲しい過去と現在があった。私は養護施設で生活しているある女の子の話を、施設の方から聞いた。彼女は家庭が貧しいため施設に入った。彼女の母親は彼女とこれから一緒に生活することを望んでいたが、今の経済状態では不可能であり、衣食住がしっかりしている養護施設へ預けることが一番良い方法だと考えた。彼女は養護施設に預けられ十二歳になった。ある日、彼女は友達と喧嘩をして施設の方に叱られた。彼女は反抗期だったから怒って「施設を出していく。家へ帰ってお母さんと暮らしたい。」と言った。彼女は母親に「迎えに来て。」と電話をかけた。しかし、母親の返事は「迎えに行きたいけどガソリンを買うお金がない。本当に帰ってくるのなら歩いて帰ってきて。」というものだった。彼女は家へとたった一人で歩き出した。しかし、その長い長い道のりの中で気持ちを整理し、施設へ戻ってきた。

子どもが喧嘩をすることも我儘を言うことも、日本の子どもと何一つ変わらない。だが、あの国の養護施設で暮らしている私よりも年下の彼女は、一緒に暮らしたいと思う相手とすら会うことができない。そんな環境の中で生きていた。彼女はどんな気持ちで施設まで引き返してきたのだろう。彼女の母親はどんな気持ちで彼女にあの言葉を発したのだろう。

カンボジアに行ったからこそ聞くことができたこの

話を、私は多くの人に伝えたい。そしてその言葉が誰かの心を揺さぶることができたら国際協力の輪は広がっていくのだと思う。カンボジアに小学校の建設をした方が仰っていた「微力だけど無力じゃない」という言葉。この言葉を信じ、私は国際協力を続けていきたい。

北海道国際センター所長賞

笑顔のプレゼント

石狩市立樽川中学校 3年
日高 孝子

それは、小学校六年の時だ。私はものを手作りする事が好きで、お裁縫や工作をよくしていた。そんな時に、ぬいぐるみを作て世界の難民キャンプや病院、施設などにいる子供たちにプレゼントするというプロジェクトを見つけた。私は、小学校で、世界の勉強ができない子供のための活動をしていた事もあり、普段からそういう事ができる事を探していた。見つけたプロジェクトは、最初は家にあるいろいろ布で作る、というプロジェクトから始まって、そのころにはキットなども発売され、だれでも参加できるようになっていた。プロジェクトのサイトを見ると、プレゼントされたぬいぐるみを持ち、とびきりの笑顔の子供たちが写った沢山の写真があった。私は、好きな手作りで子供たちを笑顔にできるんだ、と驚き、すぐに参加する事に決めた。応募すると、白とピンクのフェルトが届いた。それで、トナカイのぬいぐるみを作る。いつもミシンを使う私にとって、細

かい作業が多くて大変だったが、半年ほどかけてやっと出来上がった。白とピンクのトナカイは、雪だけと桜のイメージ、日本の「春」の色だった。そこで私は、葉と木をイメージした緑と茶のリボンを首に結び、鮮やかなオレンジ色のフェルトのちょうを頭にとまらせた。そして、それを受け取った子が春のような明るい気持ちになってほしいという願いをこめて、「HARU」と名付けた。箱に私の願いと共にHARUを詰めて、プロジェクトに送った。

今、私の作ったHARUは、どうしているのだろうか。プロジェクトに送られたぬいぐるみ達は、世界の五十七の国と地域に届けられる。私は、初めて作ったため、あまり良い出来とはいえないが、届けてもらえたのだろうか。世界中には、親に会えなかったり、食べるものがあまりなかつたりして、辛くてさみしい思いをしている子供たちがたくさんいる。私は、ぬいぐるみによって、少しでも楽しい気持ちにできたのだろうか。そのプロジェクトは、毎年行われているが、中学生になってからは一度も参加していないので、また参加したいと思っている。今度作る時には、もう少しレベルアップしたものを作りたい。また、他にも洋服やバッグを作ってプレゼントするプロジェクトもあるので参加してみたい。そういう事で、一人でも多く笑顔になってくれたらうれしい。

子どもたちの自由のために

北海学園札幌高等学校 1年
荻野 玲華

未来のために私がしたいこと。それは、世界中の子どもたちに自由を与えられるような世界にすることです。

私は今、学校に行って勉強することができて、着たい服を着て、遊んで、食べたいときにご飯を食べることができます。私にとってそれは当たり前のことです。だけど、世界には自由に過ごすことができない子供たちが沢山います。

例えば、発展途上国には貧困という問題があります。そこに住む子どもの中には、学校に行くための時間やお金はなく、勉強をしたくてもできない子どももいます。また学校へ行けないだけではなく、家計を助けるための労働も強いられます。貧困の

地域では、子供たちの自由などないです。

そんな自由のない子どもたちの支えになっているものは何なのでしょうか。

私の心の支えは、大好きな家族や友人です。一緒にいるだけで落ち着く、楽しめる、私の居場所はここなんだ、と思わせてくれる。

私の家は、決して裕福ではありません。日本の中でいうと貧乏です。お金がなくて、周りのひとはすぐ手に入れられるものでも、私にはなかなか手に入れることができないときがあります。「もっと裕福だったら…。」と思うこともあります。だけど、私は胸を張って幸せだと言えます。私には家族がいるからです。本音を話せる友人もいます。貧困地域の子どもたちにも、そんな人がいるのではないかと思います。

そもそもなぜ、地域格差や「貧困」という言葉が消えないのだろうか。それは、貧困により学校に行かず働かなくてはいけない子どもが多く、貧困のため学校に行けない、会社へ就職できないためずっと

貧困、その子どもも…という風に「負のスパイラル」ができてしまうからです。

他には、内戦や教師不足のために学校が閉鎖されてしまうことがあります。このスパイラルから抜け出しが、貧困地域の一番の課題であり、「貧困地域」という言葉をなくすための第一歩であると私は考えています。

貧困地域のもう一つの問題。それは、飢餓です。

私は以前、貧しい国について調べました。そのときに見た一枚の写真を、私は忘れることができません。ケビン・カーターの「ハゲワシと少女」という写真です。誰もが一度は見たことがあるような有名な写真です。この写真は、ワシが少女を食べようと狙っている写真です。少女は信じられないぐらいやせ細っており、立って歩くこともままなりません。

この写真を見て、私には何ができるだろうかと考え

ました。それは、「ムダ」をなくすことです。当たり前のことかもしれないけれど、その当たり前を実践するのではなくて大変です。私たちがムダをなくすことで多くの人たちが救われます。

例えば、食べ残しです。日本は食品廃棄物の量がとても多いです。自分が食べられる分だけの食べ物を買ったり、食べられるところはムダなく消費することが大切です。そうすることで食べ物の輸入量を減らすことができ、私たちが輸入しない分は、貧困地域などへ届けることができるのではないかでしょうか。

このように、私が未来のためにできることは小さなことだけれど、それを実践することで貧困地域に住む子どもを救えるとしたら、それは大きなこととなって世界を変えられると思います。そして、子どもたちに自由が与えられるのではないかでしょうか。

佳 作

貧しい人達のために私が出来ること

札幌光星中学校 1年
瀬口 まりな

五才までしか生きられない子供達が多勢いる。これが発展途上国の現実であることを小学校六年生の時社会科の授業で学んだ。住む所も、食べる物もなく、汚い水しか飲むことが出来ない。そのため、病気にかかってしまうが、医療施設が整っていないため治療も受けることが出来ないので多くの幼い命がうばわれてしまう。この事実を知り、私はがくぜんとした。日本に住んでいる今の環境とのちがいにおどろき、その環境に暮らしている子供達の事を想像しただけで私の心は苦しくなった。何か自分に出来ることはないのか考えた。するとちょうどその直後、私の通っていた小学校でユニセフ募金が児童会中心となって行われた。私の心はおどった。少しでも役に立てるチャンスかもしれないと思ったからだ。それでその時、小学校二年生だった弟に私が社会科で習った発展途上国の現状を教えた。すると弟は、とてもおどろいた様子でしばらく考え込んでいる様子だった。そして、「自分達の貯めていたお

小遣いからユニセフに出そうよ。」と言った。今までに見せたことのない真剣な表情だった。弟は自分が出したお金で、どれぐらいの子供がどのように助かるのかなどと熱心に計算したりした。こんなに優しくて思いやりのある弟を私はほこりに思った。そこで二人で相談をしてお金を出し合った。

しかし、このことは小学生の私達ができる精一杯のことだったが、「こんな小さなことで満足していて、良いのだろうか。」と考えたりしていた。そんな時、マザー・テレサの本に出会った。「大切なことは、遠くにある人や大きなことではなく、目の前にある人に対して愛を持って接すること。」とテレサは言っていたそうだ。うれしかった。私達の行いは小さすぎではない、間違っていないと確信した。

今、私が通っている中学校では、「米一合を持ち寄って、貧しい人達に送ろう。」という米一合運動を行っている。

また、学校祭では貧しい国から仕入れたフェアトレードの店を出している学年もあった。

どの運動も小さな事の積み重ねと小さなことの集まりだが、最終的にはたくさんの人のためになる大きな大切なことになっていると思う。

将来、私は何が出来るか何をしたいかは、まだはっきりとは決めていないが、今まで学んできたこれらのことの基にして貧しくて苦しんでいる人達のために役立つことをたくさんしたいと思う。

は、世界百カ国以上で水に困っている事や、毎日千四百人以上の子どもたちが五歳を迎える前に命を落としているということを知った。

私はすぐに母にたのみ、ユニセフに電話をしました。それから毎月三千円を募金している。そのお金で、重度栄養不良の子どもが助かったり、紛争下のシリアでは健康診断や治療等を行ったり、甚大な台風に見舞われたフィリピンでは簡易トイレを提供するなど、こうしたことに協力できたのがとてもうれしかった。

小さな平和を生みたい

函館市立五稜中学校 3年
土屋 七海

私たちが日本で平和に生きている間にも、たくさんの子どもたちが亡くなっていると知ったのは、小学四年生の時だった。テレビでユニセフが募金を呼びかけていたのだ。せまい世界しか知らなかった私

中学生になり、もっと外国で困っている人のことを知りたいと思い、本や、インターネットで調べた。すると、アジアでも、まだ汚れた水を飲んでいる国があると知り、とてもおどろいた。私の学校の近くにある亀田川の水はみるからに汚い。でも、写真で見ると、それよりも汚い池の水を、小さな子どもが一生懸命運んでいるのだ。本当に悲しくなった。しかも、運び手のほとんどが女の子というのだ。写真を見ながら私は思った。どうしてこの子たちはここに生まれてしまったのだろう。もし、この子たちが生まれた国が日本なら、安全に幸せにくらせたのに…。でも、こんな事を考えても何にもならないと気づき、そういう子が安全にくらせるように、がんばってタメになることを考えたり、募金したりすることが大切なんだと思った。それでも、そういったきれいな水や食べ物がない現地に行つたことのない私には、わからない色々な問題があったりするのだろう。だからこそ、私はそこに行ってみたいという気持ちが強くなった。そこに行って水をくむ女の子のお手伝いをしてあげたい。日本のおかしを持っていき食べさせてあげたい。きれいな水の出る井戸やお

風呂をつくりたい等他にも書きつくせないほどたくさんあった。

私たちは安全な国にいて、水にも、食料にも困らないし、命が危ないことなんてほとんどない。そんな平和な日常だから、小さなことで悩んでしまうし、命を軽く考える人だっている。だけど世界には毎日死と戦い一生懸命に生きている人がいると知ると、自分は幸せなんだと気づくと思う。だから私はいつかそういう生活が大変な国に行き、自分の幸せをその子どもたちに分けてあげることで、小さな平和が生まれてくれればいいと思う。

つながること

函館ラ・サール高等学校 1年
大澤 佑輔

僕と世界とのつながりは、僕が母のお腹の中にいた時からすでに始まっているように思う。米国より帰国する機内で、お腹の中の僕は暴れだし、飛行機は米国へUターン。僕の事を最優先しUターンを決めた機長、同乗していた米国人看護士さん、滑走路で待機してくれた救急車、航空会社や空港のスタッフ、搬送先の病院スタッフ、そして大迷惑をかけた乗客の人達…皆のおかげで早く生まれることなく、僕は予定どおり丸々した顔で、両親の元に生まれてくることができた。僕の首のすわった頃から今まで、何度家族で海外を訪れただろうか。飛行機に乗って降りれば、言葉も文化も違う場所がある事にワクワクし、幼い僕は世界とつながっている感じがたまらなかった。そして高校生になった今、外国で命をつないでもらった僕は、本当の意味での世界とのつながりを求めて、周りを見渡してみたいと思う。

僕達の生活の中で目にするそのほとんどはメイドインジャパンではなく、海外、主に発展途上国で生産されたものであふれている。食料だけでなく衣料やガス、原油などのエネルギー、僕の大好きなゲーム機、パソコン、携帯電話などの電化製品とその原料。見渡す限り輸入品だらけだ。そして、工場や老人施設などで見かける外国人労働者の人々。雇用まで依存しつつある。つまり、“発展途上国”と名付けて自分達の立場を少し上に感じている僕達は、そういった国々に依存しなければこの生活は成り立たないのだ。ただこうした依存こそが、発展途上国の発展にひと役かっている事も事実である。雇用が生まれ、生活が向上し、経済が発展していく。国同士という大きな単位で見れば、まさに相乗効果があるわけだ。でも、これで見落としているものは

ないのか…。今まで目にしてきた新聞記事が頭の中をかけめぐる。雇用が生まれても、満足な教育を受けていない為職に就けない人々、貧困の為食料がなく働きたくてもその体力すらない人々、人知れず産み落とされ社会的に存在しないとされている人々がいる。そういう人々を僕達は置き去りにしていないか。これではほんとうに世界がつながっているとは言えないのではないか。

確かに身の回りには多くの世界とのつながりがあふれている。でも僕達にとって“便利な”つながりではなく、もう少し視野を広げてみれば、世界にはまだつながっていない事もたくさんあることを実感する。はたして、発展途上国の人々、そして先進国であっても何もその恩恵を受けていない人々にも僕達が感じるような世界とのつながりを感じができるのだろうか。

このつながっていない部分をつなげていく事が、これから僕達の課題ではないだろうか。一時的な物資援助やボランティアは解決にならないと思う。日本が以前、支援として中古バスを送ったそうだ。現地で修理できる人も、部品を作れる人もおらず、結局粗大ゴミになったという話を聞いた。生活全般における色々な知識、技術や改善の仕方を教える“教育”こそが解決の糸口になるのではないか。

日本には定員割れしている学校や大学がたくさんある。それを有効活用し、国がお金を出し発展途上国の貧しい人々を学ばせてはどうかと思う。そこで僕達が個人として関わり、文化的交流をしていくことで、双方が世界とつながっていることを感じるのではないか。そんな日が訪れる事を、僕は自分のおられた場所で自分を磨きながら待ちたいと思う。

それが、海外での命のリレーのおかげで今がある僕の使命だと感じている。

「つないだ手」

北星学園女子高等学校 1年
齊藤 和花

その手は大きくて、辛い経験を乗り越えたしわの深い手だった。

私はこの夏カンボジアを訪れた。街の中にはたくさんのバイクと建設中のビル。その国はイメージしていたよりずっと栄えていた。そこで大変な歴史を経験した「手」に出会った。

滞在3日目。キリングフィールド、トゥールスレン博物館を訪れたところから、私のカンボジアを見る目が変わった。1975年から1979年までの4年間。ポルポト率いるクメールルージュが政権を握り、当時800万人程の人口の内およそ4分の1にあたる200~300万人もの人々が虐殺された。殺されたのは知識人と言われる教師、医師、お坊さんなどの教育を受けた人たち。他にも、命令に従わなかった人は大人子供問わず収容所に収容され、拷問され殺された。私は本や映画などの資料を見て、理解したつもりになっていた。しかし、当時のまま残された現場を目の当たりにして「この歴史は確かにここで起きたんだ…どうして、なぜ？」やり場のない怒り、悲しみが、ただただ頭の中をぐるぐる回っていた。

そんな気持ちの中、アキ・ラー博物館を訪問した。アキ・ラーさんは幼い頃両親をクメール・ルージュに殺され、その兵士として育てられた。命令に従い地雷を埋める側になり、政権崩壊と同時に解放された。命令とはいっても自分にしてきた事に責任を感じ、地雷処理の技術を独学で身につけ、今でも処理活動を続けている。彼はその時代を生き、沢山の大切なものを失った。私が想像出来ない程の大きな怒りを抱えているはずだ。しかし彼は前を向いていた。地雷回収の活動の他に、地雷で腕や足を失った貧しい子供たちを引き取り家族として一緒に暮らしているのだ。「気持ちが晴れる事はないが、そうすることが自分にとっての償いだ」とおっしゃっていました。自分を振り返ってハッとした。私は怒りを感じた

ところですっと止まっていた。果たしてカンボジアの多くの人々はその怒りの矛先をどこへ向けたのだろうか。心の中に閉じ込めたのか。いや、前進していた。私はどこを向いて、具体的にどんなことをしていこう。その時はまだ自分の答えを見つけられなかった。

後日、日本のNGOが地雷啓蒙活動をしている村を訪問させて貰った。練習して行ったヨサコイと一緒に踊ったり、じゃんけん列車をして遊んだり、子どもから年配の方まで一緒に大いに盛り上がった。あっという間にお別れの時、50代ぐらいの女性に手を引かれた。私の手をギュッと握りしめ「オーケン(ありがとう)」と何度も言っている。だんだんと彼女の目には涙が浮かび、私は力強くハグされていた。村の副村長さんだった。大人の女性の涙。16才のまだ子供の私に、少しのためらいもなく真正面から感動し、その気持ちを伝えてくれたのだ。私にとっては一生懸命頑張った一回の交流、しかし村の方々にとっては一生に一度の経験だと通訳の方が教えてくれた。こんなにも感謝された事に、私の方が胸がいっぱいになり涙が溢れた。私を抱きしめてくれた彼女の手は大きくて温かかった。何かにつけて「私なんて…」と自信のない私でも何かをやってみる、何かにトライしてみる価値はあるんじゃないかな。そう思ってくれた手だった。しかしそれは、辛い過去の歴史が刻まれたしわの深い手でもあった。辛い過去を抱えながらも前を向く、私がカンボジアで出会った人は前を向いていた。当たり前のようにも思えるけれど、それは凄いことなんだと気づかせて貰った。そう考えると、自然と涙が溢れて止まらなかった。

副村長さんの手は私に、どんな大人になりたいか、どこを向いていけばいいのかヒントを教えてくれた気がする。あの時彼女の目に私はどのように映っただろう。あの村を訪れてみたい。感じた気持ちを自分の中に留めたままにしてそこで止まるのではなくエネルギーに変えていく。真正面から真っ直ぐな気持ちで向き合いたい。私は忘れない、つないだ手の温かさを。

「笑顔をつなげ」

北海学園札幌高等学校 1年
庄司 万葉

私はこの夏、家族旅行でトルコに行きました。トルコってどんな雰囲気の所なんだろう…。もちろん観光目的なので、私自身、とても楽しみにしていたのですが、ガイドの方から聞かされる話、そして、実際に自分の目で見たトルコには、光と影があるようと思えました。トルコの人達は、日本人にとても親しみを持っている方が多いと聞きますが、ほんとうにそうでした。行く先々で「こんにちは」などと話しかけられます。確かに流暢な日本語という訳ではありませんが、「伝えよう」とする気持ちが温かく感じる話し方でした。そんな言葉も知っているの?と驚

かされる事もあり、家族で何度も笑いました。日本語を使ってコミュニケーションを取ろうとしてくれるのだから、トルコ語で返してあげる事が出来たら…。そう思っても結局は何も出来ない自分自身にがっかり。もどかしさと戸惑いが伝わるのか、常に笑顔で接してくれます。どこへ訪れても、本当にみんな笑顔です。しかし、旅の間に何度も見なくなる笑顔も見ました。それは、移動中のバスの中からでした。何車線もある道路、かなりの交通量がありました。車のスピードも遅い訳でもなく、むしろどの車もスピードが出ていたと思います。その車線の間を縫うように、小学生位の年齢の子が何かを持って歩いていました。彼は、信号待ちなどで車が止まるタイミングを見てパンなどを売り歩いていたのです。あの交通量の中を歩くだけでも信じられない事なのに危険を犯してまで働いていた姿です。私が乗っているバスに近づいてきました。窓の位置が高

いので、腕を目一杯伸ばし、パンの入ったカゴを私達に見せながら笑顔で立っていました。彼にとっては、生活するのに、大切な事だから笑わざるをえないのかもしれません。彼以外で同じようにしている子を何人も見ました。私が見た次の日も、こうして書いているこの時もあの笑顔あの道にいるのかも知れない。思い出すと悲しくなる。でも、私が彼らと同じ環境に置かれていたのならどうだろう。笑わざるをえない、なんて私の勝手な思い込みなのかも。

「今日はたくさん売れたらいいな」

「うちのパンはおいしいよ」

そんな純粋な気持ちから出た自然な笑顔だったのでないか。世界には色々な暮らしがある。日本で生まれ育った私には、陸続きにある隣国という感覚がつかめない。トルコの隣国であるシリアは内戦中です。トルコに避難してきている人もたくさんいるそうです。トルコ人のガイドの方は、

「子供の難民もたくさんいて可哀想なんです。家もないし…」

戦場から逃げるだけで精一杯なんだろうと思う。笑顔になれる時なんてあるのだろうか。争いの中から笑顔は生まれない。誰もが笑って生きていきたいのに。

旅行の間、たくさんの人に笑いかけてられて、その度に私も笑い返しました。

「トルコ、良い所だな」

言葉が理解出来なくても笑い合うだけで仲良くなつた気持ちになる。笑顔の力って凄い!!笑顔は世界共通なんだ。世界中の全ての人が笑顔になれる日は来るのだろうか。ずっと先でもいい、笑顔であふれる地球にしよう。毎日笑顔でいれるだろうか、確かに毎日楽しい事ばかりではない。でも、なるべく笑っていよう、一人の笑顔が周りを笑顔にさせるんだ。その周りの人も別の人も笑いかける。そうやって少しずつ広げていったらしいんだ。私は決めた、今日から笑顔のネットワークの発信者になろう。

過去の日本から今の世界へ

北海学園札幌高等学校 1年
畠村 汐音

私が五歳の時、陸上自衛隊に勤務している父がイラクへ行った。家族で見送りに行った時、まわりはみんな、泣きそうな顔をして「生きて帰って来てね」そう言っていた。幼かった私は、父が出掛けるだけでなぜこんなにもみんなで見送らなければならないのか、分からなかった。父がいなくても、私たちは普通に暮らしていたし、少し寂しいだけだったから、特に何とも思わなかった。ただ、時々母が口にする「パパ、大丈夫かな。」という言葉が不思議だったくらいで…。それから三ヶ月後、父が帰って来るという知らせを受け、家族で迎えに行った。着いた場所には、大勢の人がいた。人と人のすきまから見覚えのある人物がいた。「パパ、お帰りなさい」そう言って、姉が父の元へかけ寄った。私もすぐにだきついた。母は「無事で良かった。」と、満面の笑みで言っていた。あの頃は、考えてもいなかったが、今思えば、三ヶ月ぶりに見た父は、明らかにやせていた。肩幅が少し痩せまくくなり、いつも私を肩車してくれたあの大きな両手は少し小さくなっていた気がする。当時の父にだきついている私と姉の写真は、新聞に大きく掲載された。数年後、私はその新聞を見て知るのだ。父がイラクへ旅立つ時なぜ母があんな顔をしたのか。帰って来た父が、なぜあんなにも変わっていたのか。父が三ヶ月行っていた土地が、命に関わる程、危険な場所であるということを、私は少し大人になってから知ったのである。それからというもの、教科書に書いてある「陸上自衛隊イラクへ派遣」という文字を見る度に、父が成し遂げた事の重大さを知る。そして、新聞を見る度に思う。家にいなかつた三ヶ月の間に父はどれ程の命を救つたのだろう。と。

高校生になった私は、世界に目を向けるように

なった。世界ではいま、何が起きているのか。度々ニュースで報道される、世界の紛争、災害、中には日本人が巻き込まれるというニュースもあった。宗教同士の対立で何の罪もない学生が誘拐されるというニュースも見た。政府に反抗するグループによってたくさんの命がうばわれるというニュースもみた。毎日を当たり前に平和に過ごし、テレビをつけるたびに画面の向こう側で残酷な出来事が起り、涙を流す人がいる。そう考えると、この現実から決して目をそらしてはいけないと思った。

「世界に目を向けて」と学校やテレビでは言っているが、私は日本の過去にも目を向けなければいけないと思う。なぜなら、日本が過去に犯した誤ちが、今にもつながっているからだ。私は、日本がこれまでにしてきた戦争について何も知らない。戦争がどのようなものかも分からぬ。人が無残に殺されていくということが、想像つかないのだ。年号を覚え、土地を覚え、それでも大切な何かを学べていないような気がする。戦争を、過去を生き抜いてきた人々はどんな気持ちだったか。これは、実際にその時を生きた人でなければ理解することはできないと思う。私が今まで、様々な場面で戦争を生き抜いてきた人たちにお話を聞いて思った事がある。目の前で友人が死んでしまった人、家がなくなってしまった人、苦しそうな、辛そうな顔をしながら話してくれた。そして皆、必ず最後にこう言うのだ。「平和な日本になって良かった。」と。本当に、心の底からそう思う。私は実際に戦争というものをみたことがないから、戦争を経験した人ほど、戦争の恐ろしさを知らない。しかし、みたいとも思わない。人が殺されるのを、日本が焼け野原になってゆくのを、みんなが涙するのを、私は絶対にみたくない。

世界には、今もなお、戦争が存在する。人を殺すための兵器がある。大きな戦争を経験し、それが誤ちである事に気付けた日本は、平和を象徴する国でなければいけない。日本から世界へ、笑顔を届けたいと願っている。

「コーヒー豆との出会いで」

北海学園札幌高等学校 1年

山田 穂乃花

皆さんはフェアトレードという言葉について知っているだろうか。もし知っていたとしても、普段使う言葉ではないから知らない人も多くいると思う。今まで私は知らない側の人間だった。あのコーヒー豆に出会うまでは。

私の母はコーヒーが好きだ。私は飲まないのでよく分からぬが、深みのある独特の香りとほどよい苦さがなんとも言えないらしい。そんな姿を見る私は、よく一緒にコーヒー豆を買いに行く。ある日、いつも選ぶのに時間がかかるはずが、珍しく母は早く店から出てきた。良いものが無かったのだろうか。不思議に思い、聞いてみると「すぐに決まったよ。すごくいい事した気分。」と言って、コーヒー豆の入った袋を渡された。その袋には「ウーマンズハンドフェアトレードブレンド。女性の笑顔をもっと増やそう。」と書かれていた。聞いたことがない言葉だった。説明には、世界の女性たちの自立支援、社会的地位の向上などを趣旨として作られた豆で、価格に付与されたプレミアムが還元され、支援に繋がることだった。だが、なぜフェアトレードなのだろうか。そこで、私はそのコーヒー豆の生産地が気になり調べてみると、グアテマラという中央アメリカに位置する小さな国だと知った。グアテマラは貧富の差が激しく、国民の五十七パーセントが貧困層に属するため女性の身分は高くない。国全体の識字率も低いので、多くの人は小規模農業に従事する開発途上国の一つだ。コーヒーの生産国のはほとんどはこのような国だが、コーヒーの買収価格は、生産現場から遠くのニューヨークやロンドンで決められるそうだ。しかし、そこで一つ問題がある。開発途上国的小規模農家の多くは、市場への販売手段

を持っていないということだ。だから、農家たちは中間業者に頼らざるを得ない状況になってしまふ。そうすると、時に生活に十分な利益を得られず、子どもたちを学校に行かせてあげられないなどの更なる問題に繋がる。だが、私たちはこのような問題をすぐに現地に行って解決することはできない。そこでフェアトレードが必要になってくる。少しでも生産者の生活を豊かにするために、中間業者を入れず、適正な価格で購入された利益を直接生産者たちが得られるという仕組み。それがフェアトレードの大きな意味であると理解した。そう考えると、母が言っていたことも分かる。これをふまえて私は、今まで何も知らなかつたことの恥ずかしさと、フェアトレードの大切さを知ることができた。このコーヒー豆に出会わなければ、ずっと誰かの生活を少しでも支えることはなかつただろう。そこで私は、これからもっと役に立つこととして何があるか考えてみた。一つは、フェアトレード商品を購入すること。フェアトレード商品には「フェアトレード認証マーク」というものがついていて、コーヒー豆に限らずバナナやチョコレートなどもすぐに見分けがつく。ただ単純に寄付をするのではなく、商品を購入することで私たちも楽しむことができるから大きな負担にはならずすむはずだ。商品が売れれば、現地に多くの注文をすることになり、生産者たちの収入もできて、向上心がでてくるのではないかと思う。二つ目は、よく行くスーパーなどにフェアトレードの商品を扱ってもらえるように頼んでみること。大きなお店であれば、もしかしたら置いてくれるかもしれない、少し気を配りながら商品を見ていくようにしていきたい。…そして私は母に言った。「この間買ったコーヒーを飲みたい。」すると、母はすぐにコーヒーを用意し、私の前に置いた。一口含んでみると、ほんのりと苦さが広がったが、なんだか温かい気持ちになった。こんな小さなことをするだけで、誰かの支えになるのなら、これからも私はこの活動を続けていきたいと思った。

「自分が知らなかつた自分」

北海道札幌国際情報高等学校 3年

小林 詩織

半年前、学校の選択科目で選択した授業、『国際ボランティア基礎』が始まりました。生徒の誰もが、どんな先生がどんな授業をしてくれるのか分からず、私は勝手に、青年海外協力隊のような人が、どのようなボランティアがあって、どのような組織があるのかを教えてもらうのかなと想像していました。そう思っていたら教室に入ってきたのは、民族衣装のような服を身にまとめて、沢山の荷物をかかえてきた女性の先生でした。衣装は派手だし、どの国なのか分らない言葉でいさつをするし、そんな先生に私はすっかり夢中で引き込まれていきました。そんな先生が毎回私たちに教えてくれることがあります。それは、『自分自身を知ること。』本当に世界で貧困に苦しんでいる人を助けたい、病気の人

を救いたい、自分にできることをしたいと思うなら、何よりもまず自分のことを知らないといけない、そう言わされました。

先生の授業では毎回自分が知らなかつた自分を見つけさせてくれました。それは『偏見』です。先生は、ほとんどの授業をゲーム形式で行います。そこでは自分の考えだけで、自分なりの答えを出すことをしてきました。そのたびに私は、先生の言ったことを思い出します。『人は常に何枚ものフィルターの上から物事をみています。』本当にその通りだと思いました。ある国の印象を聞かれると、『貧困』とか『教育を十分に受けられない』などマイナスな答えしか自然と出てこなかつたときも何回もあります。現実をまのあたりにしたことがない、イメージでしか見てこなかつた国に今のまま行っていたら、きっと一瞬で打ち砕かれていただろうと感じます。

フィルターの上からでしか世界のことを知らない私が、少しだけ本当の世界を知ることができた瞬間がありました。それはユニセフの方々が開いて下さったイベント『地球のステージ』です。実際に

医者として現地に行っていた方によるお話と、そこで出会った人たちのことをテーマに作った歌を聴きました。公演をふり返って、私は一つ気がついたことがあります。それは、どんなに貧しくお金がなくても、病気でも、必ずそこには『笑顔』も存在することです。毎日ゴミの山に通ってお金になるものを探し続けている子供でも、老いて病気をわざらっているおばあさんでも、家がない家族でも、彼らは自分たちの毎日の中に小さな小さな幸せを見つけて生きているということです。世界の中で比較すると先進国である日本からみれば本当に何気ないことでも彼らから見れば幸せになります。私たちが物質的に何かを彼らに渡すとしたら私たちが受けとるものは、『小さな幸せを大切にする』ことだと思います。

私たちが彼らにできることは、フィルターをはがして、しっかりと目をそむけずに世界を見つめ、物質的に貧困に苦しんでいる人々と向き合うことだと思います

す。知らうとはしなければ何も見えてこないし、変えることなどできません。少しづつでも向き合っていけばきっと自分たちができることが自然と見えてくると思います。私は、医療に詳しく治療ができるというわけでもないし、何ができるかといわれて、これといって思いあたるものはありません。強いて言うなら人と関わるのが好きだということくらいです。しかし、先生の『自分の知らない自分』を知る授業を通して、きっと私だからこそできることもあると思えるようになりました。それを明確なものにしていくのには、まだ時間がかかると思います。それが確かなものになったとき、本当に苦しんでいる人に手をさしのべられると考えています。いつか私は苦しんでいる人を笑顔に変えられるような人間になりたいです。

広がっていく気持ちと幸せ

北海道札幌西高等学校 1年
土屋 花

「カンボジアの井戸募金の協力お願いします！」学祭でお化け屋敷に並んでいた私の前に、募金箱を持って協力を呼びかける執行部員の人がいた。「募金かあ…。」と私は思ったが、正直その時は財布をとり出すのがめんどうで何もしなかった。その後、募金箱を持っている友達がいたので、十円玉何枚かを募金箱の中に入れた。私は結果として募金をした。ただ、私は友達が募金箱を持っていたから、少しのお金を入れたのである。帰ってから、なぜ友達が持っていない募金箱にはお金を入れなかつたのだろうと少し考えた。私なりに考えたところ、結論は『知らないから。』だ。私はカンボジアの井戸募金と聞いて、カンボジアに井戸を建てたいのだな。としか思わなかった。よって私はカンボジアの井戸募金について無知であった。詳しいことは何も知らなかったのである。全ての人にあてはまるかは分からないが、よく分からぬものに協力してほしいと言われて、ほいほいと協力するだろうか。ほんとうに必要性があることなのだろうか、この協力は意味があるのであるのだろうか。そんなことを考えてしまう人が多いのではないか。むしろそう思うのが普通なのではないか。だから私はカンボジア井戸募金についてインターネットで調べた。すると、さまざまな企業や機関が井戸建設の支援をしていることが分かった。また『カンボジアで改善された水源を利用できる人の比率は約56%（2008）、汚れた水や不衛生な環境のために何万人もの子どもが亡くなっています。』（出典：カンボジア井戸支援プロジェクト）と記載されていたページを見て、私はショックを受けた。カンボジアの半分近くの人が安心して水さえ飲めないのである。そして何万人もの子どもが苦しみながら亡くなっているのである。そんなことを知っていたとしたら、財布をとり出すのがめんどうだから。と言って、募金をしなかったんだろうか。私はそう考えている

うちに、今までにもそのようなことが何回もあったのではないか。と少し気持ちが落ち込んだ。知らなかつことはしようがないことかもしれない。ただ、知らないゆえに、助かるはずの人の命が亡くなっていることも事実なのではないか。私と同じように、このような事実を知つていれば、募金をもつとした。という人は何人いたのだろう。学祭の閉会式で、募金の結果発表があった。確かな金額は覚えていないが、カンボジア井戸募金には2日間で3万円ほどだった。全校生徒と教員あわせて千人ほどのこの学校で、何人もの見物人が来たこの学祭でたったの数万円の寄付しか集まらなかつたのである。私は何かしなくてはならないのではないか。と思った。何ができるのだろう。次の機会により多くの募金をすればよいのだろうか。たしかにそれはしたいが、それでは足りないと思う。そして私は、自分が募金に協力しなかった理由を思い出した。『知らないから。』である。だから私は今回分かったことを、友達や家族に話してみようと思う。カンボジアの井戸の必要性、多くの人が亡くなっている現状、そして私達自身ができるることは少ないが、こうして伝えることで、協力の輪を何倍にも増やしていくこと。私がカンボジアの人を助けるのには限度がある。ただ、私がそれを人に伝えていけば、その気持ちは日本中、いや世界中にまで広がるのだろう。今、幸せに暮らすことができている私たちが手をさしのべることで、幸せの輪も広がっていくのだろう。今は何も変わらないが、私の起こす、些細な行動が未来をちょっとずつ変えていくのかもしれない。だから、今、私とおなじ境遇にある人にはどんどんできることを探してほしい。

私も、ささいなことでも行動をおこしたいと思っている。

心と心で

北海道札幌東高等学校 2年
清水 美音

この夏、カンボジアで多くの子ども達と出会い、交流する機会に恵まれた。照りつける強い日差しと真っ青な空の下、子ども達の元気な声や弾けんばかりの笑顔が輝いていた。私も汗だくになりながら、彼らと一緒にになって、くすぐりあったり、踊ったりしていた。言葉の壁など、そこには存在しなかった。子ども達の肌と私の肌が触れた時のペタッと貼りつく感じや、子ども達の独特なおいはとても心地よかったです。目が合って私が微笑むと、相手も微笑み返してくれる。遠くから手を振ると、見ず知らずの私にも振り返してくれる。そんな他愛のない小さなことで、私は心が満たされていくのを感じた。

ある小学校では夏休み中にも関わらず、朝から約400人の小学生が私達を歓迎してくれた。大いに盛り上がった全体交流が終わり、家に帰る小学生達を見送った後、私達は校庭で学校関係者の方々と食事をとっていた。すると見覚えのある1人の女の子が、自転車から降りて私のもとへ走って来た。女の子はクメール語で一生懸命何かを言いながら、一冊のノートと一本のペンを私に差し出している。訳が分からず困惑していた私に、通訳さんが「あなたへのプレゼントだって」と教えてくれた。私はただ、「オーケン! (クメール語でありがとうの意)」と繰り返すことしかできなかった。彼女の名前はネレといった。私はとにかく英語で話したが、ネレが理解できているのかはわからなかった。しかしネレは、私が話している間中ずっとにこにこしながら頷いていた。

「タウ!」

ネレがそう言い、私の頬にキスをした。言葉の意味はわからなかったが、心と心が繋がったような気がした。私がネレに見覚えがあったのは、全体交流で何度もハイタッチをした時の、屈託のない笑顔が魅力的だったからだ。別れの時、ネレはとびきりの笑顔で、

「Thank you, Mii!(私の名前)」

と言い、強くハグをした。ネレと心が一つになったように感じ、本気でずっとここにいたいと思った。自転車で帰るネレの背中を見て、何度も振り返るネレに、私は涙を隠しきれず手を振るのがやっとだった。私の心の中には、ネレからもらった温かさで一杯

になったと同時に何か引っかかりのようなものを感じ、落ち着かない気持ちが残った。

その後、カンボジアで新たな子ども達との出会いと別れを何度も繰り返していく中で、その引っかかりはどんどん大きくなっていた。皆が寝ている移動の車内では、何時間も涙が止まらなかった。自分でもよくわからない色々な感情がごちゃごちゃ混ぜになり、涙となって私に強く主張していた。

帰国して1か月経った今、ようやく心に引っかかったものの正体が見え始めた。

「子ども達の笑顔や無邪気さに、私だけが元気をもって帰って来たのではないか?」

「私はあの子達に何かしただろうか?」

この間が、私に強く訴えているのだ。実際、私はネレに何のお返しもしていない。連絡先を聞いておく、せめてフルネームを聞いておくなど、繋がりを切りたくないと思えば何でもできたはずだ。しかし、その時はその選択肢が私の中にはなかった。カンボジアに行き、多くの人に出会い、現状を知り、プレゼントをもらい、涙を流して満足していた。高校生としてカンボジアにやって来て、感動し涙を流す自分に酔っていたのだ。

私は小学生の頃から医師になると決めていた。その目的がこの旅ではっきりと見えてきた。医師として身体や心の痛みを抱えた人に寄り添い、助けになりたい。一人ひとりと心の繋がりを持てる医師になりたい。

“相手を想う気持ちは、心と心を繋ぐ”

ネレが教えてくれたこのことが、私の気持ちを一層強いものにした。医師として必ずカンボジアに戻ろう。その時こそ、あの時きちんとネレに言えなかつた感謝の気持ちを伝える時だ。

「夢を持つこと」

北海道滝川西高等学校 2年
福井 菜央

毎日、普通に暮らしていてもテレビや新聞、パソコンなどの媒体から様々な情報が簡単に手に入れられるようになった。昔なら自分が暮らしている地域が世界の全てで自分の生きる全てだったのかも

しれない。しかし現在は閉鎖的な考え方からグローバル的な考え方へ移行していかなければならないのだろう。

先日、2008年から2010年までJICA青年海外協力隊として西アフリカのブルキナファソで野球の普及活動を行い任期終了後も「ブルキナファソ野球を応援する会」代表として活動している出合祐太さんの講演会が学校の授業であった。

出合さんは青年海外協力隊時の苦労話や楽しかったこと面白かったことなど様々なお話を下

さったがやはり一番力を入れて話していたのは野球についての話だった。

ブルキナファソで最も国民的なスポーツはサッカーであるが野球はフランスの植民地だったという歴史的背景も関係してルールはもちろんどのようなスポーツであるかどうかすらもわからない人々が国民のほぼ大半を占めている。

今回、来てもらったのは出合さんだけではなく認知度が著しく低いという逆境の中でもプロ野球選手になりたいという夢を叶えるために日々努力している現地の青年が訪れた。

ブルキナファソの青年の心の底からプロ野球選手になりたいという強い決意を聞いて少し羨ましく思った。それだけ熱中できる夢を持てたのならどれだけ幸せだろう。それと同時にもしもプロ野球選手になる夢を叶えられなかったときはどうするのだろうとも思った。現実とはそう甘いものではないと思ったのである。

しかし、現在の日本では大人も子どもも夢を見るこを忘れているのではないかとその時ふと感じた。現

実ばかりを見つめて将来の夢や希望をもつことを諦めていたのだ。私は先進国に生まれ恵まれた環境にいることが幸せであると思っていた。だから発展途上国に暮らしている人々はかわいそうな人であり不幸なのだと、お金を送ることで助けてあげているのだと思っていた。しかしどうだろう、お金を送ってあげる事=その人たちが幸せになれるという方程式を単純に受け入れていいのだろうか。

本当の幸せとはお金があるからではなく自分を信じ続けられる夢や希望があることが眞の意味での幸せであり心の豊かさなのだと実感した。

出合さんの講演を聞いたことがきっかけで、青年海外協力隊の真髄がわかったような気がする。お金だけでは伝えることが出来ないことを伝えることが本当の意味での支援なのではないのだろうか。

未来につながる力

北海道留辺蘂高等学校 3年
大原 千明

世界には紛争などの争いや、貧困で苦しんでいる国々があります。この状況は今に始まったことではなく、昔から問題になっていることです。この問題を解決する為には多くの人の支援が必要となっており、また子供たちに关心を持ってもらうことも重視されています。ですが私は未来のためにしたいことが思い浮かびません。それは世界の現状をよく理解していないからです。テレビや新聞で出てくることはあっても、その内容が理解出来ず、無関心になっているからだと思います。そこでどんな方法でもいいから、普段から世界のことをもっと知ろうとすることが大事だと思っています。

私の将来の目標は義肢装具士になることです。義肢装具士を目指そうと決断したのは兄と一緒に行った大学のオープンキャンパスで、たまたま義肢装具学科のブースを見つけて興味を持ちました。そしてテレビの“プロフェッショナル”という番組で義肢装具士の林伸太郎さんを見ました。その中で、林さんが作った義肢を患者さんが身に付け喜ぶ姿に感動し、自分も誰かのために作りたいと思うようになりました。しかし、どんな義肢装具士になりたいかはっきりしていません。なぜなら、義肢装具には多くの種類があるからです。義手や義足の他にも指を本物のように細かく作ったものや事故や病気が原因で麻痺した体を支える装具、車イスなどがあります。義肢装具はただ作るだけではだめなのだと、なぜなら切断した部分の形や大きさは人それぞれ違うからです。だから患者さんが義肢をつけて何をしたいかによって作ることが必要だそうです。こういった細かい作業を繰り返すことで、付けるのを忘れるほど性能の良いものを作ることがで

きます。

体が不自由な人は日本だけではなく、世界中でいます。なぜなら事故や紛争で足を失ったケースが多いからです。その国にも義肢装具を作る人はいても、性能が悪く、性能の良い日本の義肢装具が求められています。そのため日本には、世界で活躍している義肢装具士がいます。他にも全国から使わなくなったりサイクルし、無料で提供する活動が行われているそうです。また、現地の人たちが義肢装具を学べる環境も作ろうという活動もしているそうです。私が思う義肢装具士の役割とは、体の一部を失い不安になって自信が持てなくなった人たちが、再び希望が持てるようになります。そして患者さん一人ひとりの人生と向き合う仕事です。大変な仕事だと思いますが、これからも義肢装具士の存在は必要になると思うので、大学に進学し、幅広い視野を持って学んでいきたいと思います。

最初は未来のためにしたいことといつても、私の力でいったい何ができるんだろうと思っていました。でも未来のためにできることは、けっして一人だけの力ではないと思います。なぜなら未来は皆の力を合わせて作られていくものだからです。やり方は全く同じことではないけれど、自分が将来の目標としていることが未来につながっていきます。だから私は自分の目標に向かってたくさん学び、様々な経験をしていきます。

青年海外協力隊 北海道OB会会長賞

リレー

旭川市立愛宕中学校 1年
佐野 凪未

「おお！第一走者は、釣りが趣味の私のおじいちゃんだ！おじいちゃんの手にはバトン…ではなく、釣ってきたカレイがある！生きいきとしている。これは新鮮だ。早く第二走者へ渡さなければ！そして、今カレイが渡った！第二走者は、料理上手の私のおばあちゃんだ！さて、このカレイをどう変身させるかが気になる。ん？ポケットから何かでてきたぞ。なんだあれは！調味料だ！早い早いどんどんカレイがいい匂いをただよわせながら変身していく！変身したカレイが第三走者に渡った。第三走者は、農家の私のおばあちゃんだ！ばあちゃんの手にはツヤツヤでほんのり甘いお米だ！最高のコラボレーションで、私の口へゴール！！」私の顔がほころんでいく。

私の幸せな瞬間、ご飯を食べる時。よくこんな実況を心の中です。おいしくて笑ってしまう。これは自然現象だと思う。この命の連携、リレーが私の口の中でゴールをおこなうということがとても嬉しく感謝しているからだ。みんな同じだと思う。しかし、このありがたみをわからない人たちがたくさんいる。逆に、わかっている人の方が少ないのでないかとも思う。わからない人はその食べ物の良さに気づけていないのだと思う。祖母の話しでは、戦争中の日々は、お米などというぜいたくな食べ物は手に

入らず、かぼちゃやじゃがいなどをうまく調理するしか方法はなかったという。今、現在、コメを食べていることがどれだけありがたいことだかわかる。「私、あんまりお米好きじゃないんだよね。」「俺、かぼちゃとかじゃがいもとかキレイ。」なんて言われると心が痛む。戦争が終わり、幸せがやってきて、かぼちゃから米へ主食がかわるというリレーの末、今食べられているのに。他にも、このような事があった。私はある動画を見た。それは、骨が見えるまでやせている私より小さな子供たちが、注射されていて、その注射を増やすべくボランティアをしてくれと涙ながら訴えるアーティストの様子だった。動画は外国のものだったので正確に合っているかわからないが、私はそう受け取った。多分、その子たちはリレーのゴールが自分達ではないのだと思う。その子たちがゴールになるためにも、その地でできた物をいち早くその子たちに食べさせればいい、地産地消をすればいいのだと思う。もし、その地が農業のやり方、この地にはどんな農業が適しているのかわからない場合は、世界が団結して、知識を教えあれば良いのではないだろうか。これもまた、立派な命のリレーの始まりだと思う。私は身近な友達にこの話しをして食の大切さを伝え、未来へ向けてどうすればよいかなどのコンクールにも作文を応募し、考えを少しでも広げたいと思う。

リレーはつながりだ。つながらなければ、ゴールには届かない。人も同じだ。支え合って生きている。この支え合い、つながって命がここにあることを忘れないでほしい。

広がる未来

石狩市立樽川中学校 3年
高橋 紗英

私は、私自身のやり方で、世界とのつながりを考え、その道を創りたい。増やしていきたい。そのためにはどのような手段で目的に達することができるかを考えてみようと思う。

現在、インターネットは、多くの国でたくさんの人々によって利用されている。私も、よく利用するが、利用方法は様々であり、その技術はとても進歩している。これは、世界と簡単につながることができるのである。この手段を活用しようと思う。

私が、世界とつながりたいと思った理由は、多くの国を訪れ、色々なことを学び、たくさんの人々と音楽やファッションを通して人の心と関わりたいと思うからである。しかし、この気持ちを実現させることは、とても難しいことだと思う。例えば、世界的アーティストとして有名な方が、ミュージシャンとして音楽活動を続けながら慈善活動を行っていたり、そのほかにもファッションで注目を集めている音楽家の方なども、たくさんの社会貢献活動に取り組んでいたりする。自分自身の仕事に務めながら

も、ボランティア活動を行っているのである。この情報を知ることで私は思ったことがある。それは、自分は世界でとても小さな存在であり、一般人がこのような活動を通して世界とつながることは不可能なのではないか。そこで、インターネットの存在に気づいた。世界には、たくさんの人が生きている。そして、世界の問題を少しでも減らし、支援活動を行いたいと思っている人は他にもたくさんいるのではないか。その人々とつながることで協力することができるのではないか。そう思うと、自信がわいてきた。世界とつながるとはどういうことか少しわかった気がした。そして、私が本当にやりたいことは何かを考え直すことができた。それは、音楽で楽しみを一緒に感じ合うことやファッションの勉強をして、服のかわいいところを知ってもらったりして、世界の人々と楽しむことの大切さを分かち合うことだけではなく、このつながりを追求しながら、服がたりなくて苦しんでいる国にたくさんのかわいい服を送れるようになることだ。他にもきっと私たちにできることはたくさんある。世界のどこかで困っている人々のために、探し続けていきたい。

世界の未来のためを想ってつながることを考えることにおいて、私の未来は私のための未来としか思っていなかった。しかし、世界のため、未来のためにやりたいことが見つかったことで、世界の未来に

広がる可能性を感じ、私の未来も、世界の人々の未来の希望へつながる気がした。今は、色々なことを学

び、たくさんの発想をもとに夢を広げていきたい。世界と私は、これからつながっていく。

「平和な未来を実現するために」

札幌市立西岡中学校 3年
磯山 大河

小学四年生の頃のある日、私は友達とおにごっこをして遊んでいました。その途中、一人の友達が転んでひざから血を流し泣きだしました。その時私は自分に何かできることはないかと勝手に頭が考えていた、すぐさまポケットにしまってあったハンカチをぬらしに行きました。そしてそのハンカチで友達の手当をすると泣いていた友の表情が自然と笑顔に変わり、「ありがとう」と言ってくれました。

このほんのわずかなでき事を境に私は、人を助ける喜びを覚えました。と同時に、ニュースなどを見たびに悲しくなりました。

殺害された。外国で紛争が起きてる。自殺した。などどうして何の罪もない人間が死ななくてはいけないのか。どうして人は殺し合うのか。当時小学生であった私は疑問と同時に怒りさえも覚えました。

ですがそんな私の想いも届くはずもありません。その当時から今でさえも殺人や自殺は毎日のように目から耳から飛びこんで来ます。

でも私は、将来何としてもこんなことの起こらない世界になってほしいと毎日思っています。ですが思っているだけでは何も変わりません。ですが、じゃあ何をするのかというと正直何も案は浮かばず、結局自分にはどうすることもできず毎日毎日人

が死んでいくのをだまって聞いていなければいけないのかと思うとくやしくてたまらず涙も流しました。

そしてある日、学校で「窓割れ理論」という理論を習いました。その理論とは、ある窓が一つだけ割れている場所と窓が一つも割れていない場所があると、一つだけ割れている方は、誰かが一つ割ったんだから私も割ってしまおうという気持ちになり、最終的には全て割れてしまうことが実証されているそうです。

これを聞いた私は、まず地域を明るくして自分の周りだけでも良い社会にしていこうと考えるようになりました。その日から毎日、見つけたゴミは捨てる。ということをかかさずやっています。ゴミも、誰かが捨てていったんだから私も捨てようと考える人がいるから永遠にゴミは消えない。なら私がゴミをゼロの地域にしようと考え、今も続けています。

そう考える内に、将来の夢は消防士になろうと思いました。人の役に立ちたい。一人でも多くの命を救いたい。この気持ちを存分に發揮できると思うからです。そして消防士になるために、毎日辛いトレーニングも毎日欠かさず取り組んでいます。

私が望む世界は、争いのない平和な世界ですが、そんな簡単なことではありません。だからといってあきらめたら何も起きません。

なので私は一つずつ小さな事からやっていき、平和な世界にするための努力はやめません。そして私と同じ考えをもつ人が一人でも多く増えてくれることを信じて、また今日も未来のために何ができるかを考えています。

集団的自衛権といじめ

北海道手稻養護学校 3年
小田切 宏太

今、テレビのニュースを見るとよく集団的自衛権という言葉が出てきます。私は最初「集団的自衛権」とは何なのかわからず、インターネットで調べていると、「友達(同盟国)がいじめられたときに(他の国からの攻撃を受けたとき)一緒にやり返して良い」と書いてありました。そのことを見たとき、私は昔いじめを受けたことを思い出しました。

私は障害者です。だからいじめを受けたのかもしれませんし、何か私がやられた人にやったのかもしれません。ですが、そのとき受けた「いじめ」という行為は今でも思い出したくないくらい深刻なものでした。今考えてみると、私が攻撃したとしても、その行為はどう考えてみても釣り合わないものでした。

私はその当時、「もう、いじめというものを他の人に受けて欲しくない、いじめというものをしてはいけない」という今ではごく当たり前のやうなことを再確認しました。

ですが、それと集団的自衛権になんの関係があるというのでしょうか。先ほど、「いじめられたときに一緒にやり返して良い」という表現をしましたが、それは本当にいいことなのか、やらなくてはいけないことなのかと言うことです。すでに私はいじめを受けた身です。ですが、そのやられた人にやり返そうとはしませんでした。なぜなら、その行為はその人にとって「いじめを受けた」と思うからです。そこでやり返すとまたやり返しが来る。そのくり返しです。世界規模で考えても同じ事なのではと思います。しかし、規模が大きいので死人がたくさん出ます。国家間のいじめとはそういうものなのではないかと思います。集団的自衛権を行使するということはやり返すと言うことです。それこそ戦争につながってしまうのではないかと僕は考えます。

「世界」と聞くとかなり大きいものを考えますが、自分だってその世界の中にいます。日常での経験は必ず使えると思うし、経験から思ったことも間違いないと思います。それを世界規模で考えた時に何が起こるのかというのも身の回りで起こった時と同じになるのでは、と思うといつでも世界とつながれると思うし、自分なりの考えを持てると思います。

民族理解と援助

釧路町立富原中学校 3年
須貝 くるみ

国レベルだけでなく、NGOなどを通じて援助活動が活発に行われている。金銭的なもの、物質、人出、教育などさまざまな形での支援がある。国際貢献の好例の一つといえる。しかしこれらはあくまでも「援助側」の見解にすぎないと私は思う。では、こういった支援は今まで十分だったのだろうか。文化や歴史や価値観の違う人たちが望むものを、ただ一方的に援助してきたことで、本来の民族性を奪ってはいないだろうか。便利、効率がよいという理由で先進国のやり方を強要しなかったのだろうか。大切にしなければならない民族の誇りを傷つけてはいないだろうか。とそういう活動がTVや新聞で話題になるたびに考えてしまう。たしかに支援はとても大切だ。しかし私は最近、一方的な支援だけでは自己満足でしかないと思う。

小学校の時、私の学校ではJICAの方々が年に一

度学校にいらして私達の先生の授業をごらんになっておたがいに教え方や授業について交流していた。私はこの事を通して交流することの大切さを学んだ。ふだんはTVや新聞くらいでは一部のことしかわからないが、交流することによって相手の価値観や文化そして民族性もわかると思う。そして交流からは多くのことが学べる。先進国の考えはすべてではなくそうではない国々から多くのことを学ぶことができる。その学んだことをおたがいに生かすことができればこんなに素晴らしいことはないと私は考える。そして学ぶために今中学生である私がしなくてはならないことは英語をしっかり学ぶことである。私は英語が得意ではないが人と接することは好きなので話せないということはとてもつらくて悲しいことだ。なので悔いなくやりたい。そして将来的には必ず海外に出たい。そして様々な国に行ってその国その国の文化や歴史や考え方を学んでその良い所を取り入れる柔軟な考え方を持つ世界に通用する人になりたい。

「小さな力」届けます

更別村立更別中央中学校 3年
小本 乙乃

世界の人々は、今、どこで、何をしているのだろう。豊かな国で元気に学校へ通う子供達。限られた資源を頼りに必死に生活している人達。医療が発達していくなく、次々と亡くなってしまう幼い子供やお年寄り。そんな人達のために今、私たちが出来る事はなんだろう。今回私は地雷について考える事にした。

四年前、私達の学年はカンボジアの地雷撤去のため、チャリティー収穫祭を行った。自分たちの手で田んぼをやわらかくし、苗を植え、稻を刈り、脱穀し、精米した。お米を一から作るのは大変だったが、カンボジアの人達の苦労に比べると米作りくらい大した事なかった。その米でお餅をつき、他にも

色々な物を手作りし、収穫祭を開いた。それを食べてもらい気持ちだけでもと募金してもらったお金をカンボジアに送った。するとそのお金で地雷を三個も撤去出来たそうだ。自分達の苦労で何人かの命を救えた。これほどの達成感を感じられたのはおそらく初めてだろう。人が人を救い、助け合いながら生きていく。当たり前な事をそう簡単に出来なくなっている世の中には助けを求める苦しんでいる人も少なくはない。今、開発途上国と呼ばれている国では不規則な生活を送らないといけない状況で栄養不足に陥り、満足に子育ても出来なくなっているのだ。しかしそんな人達を、可哀相と思ってはいけないと私は思う。ただ少しだけ、恵まれなかった部分がある。というだけで、中身は皆と同じ人間なのだから。

世界中には色々な生活を送っている人がいる。一人の力は小さいが、どんなことでも協力すればそれはきっと大きな力となり、現地の人々に届くだろう。

「お互いを理解し合うということ」

北海道旭川商業高等学校 3年
追久保 佳奈

私は、高校2年生の夏から3年生の夏までの約1年間、私の住んでいる北海道旭川市と姉妹都市の関係である、アメリカ・イリノイ州ブルーミントン／ノーマル両市に交換留学生として派遣させて頂きました。日本とアメリカ。全く違います。言語も文化も考え方も価値観も、何もかもが違いました。私も最

初はその違いに苦戦し、辛い時期も沢山ありました。ですが私はある時にその「違い」を全く視点で見直すことができた出来事がありました。それは、私がホストファミリーのみんな、友達、学校でのアメリカ歴史の時間のことでした。「戦争」の話です。たまたま学校のアメリカ歴史で戦争についてのトピックが挙がった時、私は「これだ!!」と思いました。私がこの留学で果たしたかった一つのこと。それは現地の人たちと「戦争」について話し合うこと。この時私はただ単に現地の人たちがどう思っているか関心があつただけではなく、ずっとJICAの国際協力に興味があつた私は、インターネットや本で読ん

で得た知識だけではなく、その「生」の声を直接聞きたくてずっと心に思っていたことでした。私が戦争のことをトピックでやっていた頃には、私もホストファミリーや友達ととても良い関係であった為、彼らの素直な気持ちを正直に話してくれました。日本とアメリカでの戦いのこと、原爆のこと、真珠湾攻撃のことなど私がずっと聞きたかった事がらです。みなそれぞれの気持ちを私に伝えてくれました。ですが皆、共通して言っていたこと。それは、「日本人もアメリカ人も、最初はお互いを恨み合ってはいる訳もなく、嫌い合っている訳でもなかった。その時代とそのお互いの『国』がそうさせた。」私はそれを聞いた時、日本人にもアメリカ人にも違いなんて一切全くないんだと感じました。皆一人一人同じ人間で、怖がる気持ち、痛い気持ち、嬉しい気持ち、楽しい気持ち、その形に違いは有れど、皆同じ様に感じ、同じ様に思い、同じ様に笑えるのです。「アメリカ人」だから、物事をはっきり言えて「日本人」だから言えないとか、「日本人」だから静かで「アメリカ人」だからさわぐのが大好き。そんな様なある種のステレオタイプだけに、囚われていた自分がそこにはあったんだと思います。そういう風に私が感じられる様になってからは、友達・家族への接し方や感じ方が変化

していった様に思えます。まずはお互いの『違い』を理解して関係を培っていくことも大切ですが、そこだけに囚われてしまうと、もっと大切なモノが見えなくなってしまうんではないかと思います。自分がどれだけ相手と関係を深めたいか、その為にはどうしていくべきか。その為には、国柄や国民性などの先入観に支配されることなく、「相手」と向き合うことが大切なんだと感じました。同じ日本に住んでいたって、人それぞれ価値観、考え方、物のとらえ方は違ってきます。ですから衝突も起きますし、喧嘩にだってなります。それを踏まえた上で、言語も違い、文化も違えば、宗教も違う外国の人々とどうしたら打ち解けるのか、それはお互いがお互いを思いやり、「違い」を否定するのではなく受け止め、お互いに歩み寄ろうとする姿勢が大切になってくるのではと思います。ですがそれは国外との関係だけに言えることではなく、また同じ国内でもお互いに譲歩していくことが、これから日本に、世界に共通して大切な姿勢だと私は思います。そんな私たち人類の未来の為に、私ができるのはそのみんなの「想い」を言葉で伝え行動していくことです。1年間の留学経験で培った語学能力と現場経験を世界の為に役立てて行きたいです。

明日を生きる子どもたち

北海道旭川商業高等学校 2年
白幡 咲紀

日本という国に住む人間に、毎日『明日』というのに怯えながら生きている者はいるのだろうか。周りには沢山の緑があり広大な海がある。それぞれ住む場所に恵まれ、毎日三食しっかり食べることができ、明日着るものに困りはしていない。そして日本の子どもたちは義務教育という形で学校という場所で『文字』を学び、『言葉』を学び、『人ととのつながり』を学んでいる。日本の中だけではなく周りの国々との交流を持ち異文化を知ることもできる。

私もその中の一人だ。だが『明日』というのに怯えながら生きてはいない。今まで平和に暮らして学校で知識を身につけている途中だ。そんな私に数枚の写真が配られ、その中で一枚だけ今でも目に焼きついている写真がある。その写真には体中に火傷の跡が残っている子ども、片足や片腕を失っている子どもの姿が写されていた。

写されていた子どもたちは、今の私と同年代の子だったり、私よりもはるかに年下の子どもだった。その子どもたちは、今でも紛争が続く国に生まれ特に男の子は年齢など関係なく銃を持たされ『明日』を生きるために戦っているのだという。

しかし、『明日』を生きるために戦うことがその子どもたちを救うことに繋がるのだろうか。子どもたちが「明日を生きるために、明日を生きるために」と思いながら戦っているのだとしても、明日も辛い戦いをしなければいけない。明日自分は殺されるかもしれない。その繰り返しではないだろうか。子どもたちの中にある恐怖がなくなることはないのではないか。そんな考えが答えを見つけることができず私の頭の中を巡っている。

国と国とのつながりも必要だ。私たちがいま平和に暮らしていけるのは日本だけの力ではない。他国とのつながりがあるからこそ他国は日本に力を貸し、約三年前に起った東日本大震災へも沢山の国から救助隊員を震災にあった方々を助けるために駆けつけさせてくれた。感謝してもしきれない。では、私たちだけが命を繋ぎ平和に暮らしていく良いのだろうか。国と国とのつながりよりも『人ととのつながり』が一つの地域や国を助けることができるのではないかと私は思う。子どもたちが銃を持たされることも、紛争で使われている地雷で体の一部を失うこともなくなる。子どもたちの恐怖は『明日』を生きることへの希望へと変えてあげられるのではないかでしょうか。全ての国とは言い切れません。ですが、一つでも多くの国の子どもたちが学校へ行き、食事をしっかり摂ることができ、友達をつくり遊ぶことができ、勉学に励むことができる。

そしていま、時代は変化しつつあります。紛争に使われていた地雷は今でも地面に残り、その地雷に気づくことができないという恐怖の中、地雷を見つけることができる探知機で探し出し取り除くという作業が行われています。一つ見つけ出すことで一つの恐怖を取り除くことができるのです。

今の私では子どもたちのためにできることなど何一つありません。ですが私は、子どもたちの元気な姿と怯えた顔ではなく笑った顔が見たい。日本から遠く離れた国であってもその国の子どもたちが笑って暮らしているだけでその国は変わることができる。怯えなくても『明日』という日を迎えることができるのだと私は願い続ける。

「言葉」の重要性

北海道剣淵高等学校 1年
川原 亜弓

私は、本やネットで「名言」を探すのが好きだ。ジャンルはその時の気分によって様々だが、言葉によっては本当に心にくるものがある。その中で、私が一番好きな名言はこれだ。

「あなたが空しく生きた今日は、昨日死んでいった者があれほど生きたいと願った明日」有名な名言だ。元は韓国的小説の言葉らしい。私が初めてこれを目にした時、今までのどの名言よりも心に刺さった。自分自身に当てはまる部分があったからだ。日々をなんとなく生きるだけというのは、毎日を必死に生きている、もしくは生きていた人達の気持ちを踏みにじる行為なのではないか。そんな風に考えさせられてしまう。名言が好きとは言っても、私の場合は見て少しすると忘れる程度のものだが、この言葉だけはいつまでも心に残り続けている。これは恐らく私だけではないのだろう。先程も述べたように、この言葉は名言の中では割と有名なものだ。多少言葉が違ったりもするが、多くの名言集やサイトで見かける。それは、それだけたくさんの人達の心に残ったということだ。

しかし、この言葉を知って変わることができたなどという人は極小数だろう。その日一日を無駄なく完全に有意義に過ごしている人なんていないに等しい筈だ。そもそも人によって有意義なことは違つてくるのだから。だがそれでもいい。ただほんの少し、この言葉を知った時の気持ちを心に留めておけば、それでいいと私は思う。その時点で意識するとなしで人は変わり始めているからだ。

だからこそ、私はもっとたくさんの人に「言葉」に触れてほしい。小説、新聞、ネット、漫画もなかなか

悔れない。別に「名言」でなくてもいい。心に残ったものや今の自分に大切だと感じたものを頭の隅にでも覚えておく。いつまでも覚えていれば、それは自分自身への教訓にもなる。ただし内容にもよるだろうが。例え覚えていなくてもそれまでに知ったたくさんの言葉が知識となって、いつか様々な場面で助けてくれるだろう。

「言葉」を学ぶというのは、個人の人生だけではなく、世界的にも重要だ。今世界では、国同士でたくさんの問題を抱えている。日本で言えば島や領土の問題といったところだ。それらは解決することなく、関係は悪化する一方だ。ならば逆に考えてみるのはどうだろうか。解決してから仲良くなるのではなく、仲良くなつてから解決に向かうのだ。政府からだけでなく、両国民からも手を取り合う。今の国民達は、会つたこともないのに一部の過激な人の行動だけを見て色々と決めつけてしまう人が多いと思う。そういう先入観を捨て、「お互いに」相手を知ろうとする姿勢は大切だ。TVなどといったメディアには頼らず、自分で確かめる。日本も他の国も、そういうことに欠けていると感じた。

そのための基礎となるのがやはり「言葉」だ。意思の疎通ができないければ、文字通り話にならない。他の言葉を知れば会話ができる。会話している内に互いの常識や思想のちがいに戸惑うかもしれないが、よく考えれば同じ国の人同士でもそうなつたりするのだから大した障害ではない。そして、それらの違いを認識し合って初めて、国の問題に向き合えるのではないだろうか。

「言葉」は、人と人との繋がりにあたって欠かせないものだ。しかし、使い方を間違えれば相手を傷つけてしまう、便利でも危険な代物だ。だからこそ、私達は言葉を学ばなければならない。使い方を間違えない為に、そして自分自身の人生を楽しむ為に。

「言葉ではなく、動きで伝えるもの」

札幌清田高等学校 1年
飯塚 麻友

大通公園にできた人集り、そこには一人のロボットの被り物をつけたパフォーマーがいた。そのパフォーマーの名前は「ロボットのぞみ」。のぞみさんは、パントマイム、ブレイクダンス、マジック、大道芸などを組み合わせてパフォーマンスをするパフォーマーだそうで、その日はストリートパフォーマンスをしていた。私はそのパフォーマンスを見て、涙が出そうになるほど感動した。

パフォーマンスが始まり、のぞみさんがロボットの被り物をつけ、さまざまなテーマの作品を演じてゆく。私が見たパフォーマンスはある心を持たないロボットがいて、そのロボットはしおれている花を見つけても何も思うことなく通りすぎてしまう。しかし、パフォーマンスを見に来ていたお客様と握手をすることで、心をもつようになる。そして、さ

き何も思うことなく通りすぎてしまったしおれた花の所へ行き、花がしっかりと育つように地面に植えようとするが、花はしおれてしまう。そしてロボットは自分の命に変えてでも花を助ける事を心に決め、自分の命を花にふきこんだ。すると花は元気になった。そしてロボットは自分に心を持たせてくれたお客様に花を渡す。そしてロボットは壊れて動かなくなってしまう。という作品を見た。私はこの作品を見て、人を思いやる心や、誰かのために何かをするという大切な気持ちをもう一度思い出させてくれたような気がした。言葉ではなく、パントマイムで大切なメッセージを伝えられるということにとても驚いた。

私はこのパフォーマンスを見た後にインターネットでのぞみさんのことを検索してみた。すると、このパフォーマーは、「いじめ」「自然」「命」「愛」「社会」などのテーマでパントマイムをしている方だった。インターネットには、たくさんののぞみさんがパフォーマンスをしている動画があった。その中で、「ロボットと赤ちゃん」という作品があり、私はそれを見て、思わず涙がこぼれてしまった。この作品は、戦争と

家族愛がテーマになっていた。鉄砲を持ったロボットが戦争を行っていた。たくさんの人を殺してしまうが、ある時一人の赤ちゃんを見つけた。始めは殺そうとするが、泣く赤ちゃんを撃つことはできず、赤ちゃんを抱き抱える。すると、心を持たないはずのロボットは心を持ち、赤ちゃんの頭をやさしくなでる。その時、他のロボットの兵士たちがその赤ちゃんを見つけ銃で殺そうとする。心を持ったロボットは赤ちゃんを必死に守ろうとした。すると、次の瞬間兵士たちはロボットめがけて撃ちはじめる。ロボットはボロボロに壊れてしまうが、命がけで赤ちゃんを守りぬいた。という作品でした。戦争の残酷さや、命の大切さがよく伝わるとしてもメッセージ性の強い作品だと感じた。

このように、日本には戦争やいじめなどをなくし、平和な世の中になってほしい、と思う人達がいて、その気持ちを他の誰かに、次の世代に伝えたいという人がいる。きっとたくさんいる。日本だけではない。世界

にもたくさんいる。そして、私もそう思っている。しかし私は、そう思っていながらも、あのパフォーマーのように誰かに伝えたりするということは、まだできない。きっと私のように思っている人は多いと思う。そんな私たちができるとは何であろうか。それはきっと、今私がエッセイを書いているように、この世界を、自分のことをこのような機会に見つめ直すことだろう。そして、このエッセイに今、自分が思っていることを書くことだろうと私は思う。自分の考えを伝えることが、世界を変えるための第一歩ではないかと私は考える。

医療で世界をリードする

北海道札幌西高等学校 1年
佐部田 智華

日本が世界のためにできること。それは先進国としての役目をしっかりと果たすことだ。今の日本には、それができているだろうか。この問い合わせてみるさんはどう答えるだろう。医療で世界をリードする役目について。

医療と言うと、真っ先に思いつく事は、日本から世界各地へ医者を派遣し、現地で働くという方法かもしれない。だが、私はそうするよりも、現地の医療技術を向上させる事が尊重するべきだと考える。なぜなら、確実に現地の医療技術を向上させない限りは、その国の発展は望めず、永遠に日本から医者を派遣し続けなければならないからだ。そして日本が医療技術を伝えたある国が、他の国々へとその技術を伝えていくことができたなら、世界全体としての医療技術の向上に繋がる。そのために、日本の中で、医療技術を伝えていけるような人材の育成が必要だ。その点が今の日本には欠けているのではないか。日本、つまり自分たちのための医療から、世界、つまり万人のための医療にシフトしていくべきなのだ。それが日本が医療を通して世界全体の発展のためのまず最初の中継地点である。

次に、日本が世界に役立つ場として思いつく事は、創薬の場である。創薬というのは、それを行う人材と最先端の機器、さらに経済力のある国でなければ、ほぼ不可能に近い。それはつまり、日本が担わなければならないということなのだ。私が興味、関心を持っているのがこの分野で、将来は薬の研究、改良や新薬の改発に携わりたいと考えている。なぜなら、日本にかかわらず、世界のどの技術を以ってしても治らぬ病がまだ多く存在しているからだ。そして、それらは主に医療技術の発達していない、発展途上国で広く伝染しているのだ。もし、発展途上国の人々が治らぬ病にかかり、その多くが亡くなってしまえばその国の発展は一層難しくなるだろう。以上のことから、世界全体の発展のために日本

の創薬の技術は役立つことができるのである。これが2つ目の中継地点だ。

これまで、医療技術と薬の2つのことに関して述べてきた。だが、この2つだけでは終わらない。今ある医療技術を伝え、今ある創薬技術を伝える。それだけでは世界全体としての発展には程遠い。今ある技術を少しずつでも発達させなければならない。これは日本としてだ。さらに、医療技術や創薬技術を発達させる方法を伝えなければならない。これが世界全体の発展への大きな鍵となる。しかしこれが最も難しいのであろう。となると、ここまで述べた3つの段階を終了するためには膨大な時間と費用を要する。今までの世界全体の発展の進捗状況に変化が少なかったのはこのためではないか。ここで、よく考えてみると、昔は高価で人々が手にできなかったものでも、現在の人々は当然のこととして手に持っているものがある。つまり、現在、膨大な費用がかかるものでも、費用を抑えられるような技術がまた発達すれば、それは現在よりも安価になり、人々が手にできるようになるのだ。世界に伝えられるだけ伝えたあとは、また新しいものを伝えられるようになるための技術を発達させる。これが3つ目の中継地点だ。

最後に4つ目の中継地点も無ければ、ゴールも無い。現在ではゴールはまだまだ先にあり、場所さえも分からないほどだ。今まで述べた3つの中継地点を何度も何度も通ることで、世界は少しずつ少しずつゴールに近づいてゆく。でも、その最中にいる人々はゴールなどは分からない。なぜなら、新しいものには必ず課題が付き物だからだ。課題の存在しないものなど、この世に存在しない。だからこそ3つの中継地点を通り続けなければならないのだ。そして、最初に提示した問の私自身の答えとして、日本はまだまだ世界の役に立ってはいない。だからこそ私はこの永遠の道のりをずっと歩み続けたいのだ。

世界を変えることはできない

北海道札幌西高等学校 2年

中田 結依香

私の好きなあるバンドの曲の中に、「僕たちは世界を変えることができない」というものがあります。日々、テレビや新聞では様々なニュースが流れ、世界中の貧しい人々、苦しんでいる人々について知る機会は多いです。私達は恵まれた環境にいるのだから、そんな人々のために何かしてあげたいと、誰もが一度くらいは思ったことがあると思います。でも、どんなに心を動かされて、募金をしても、食べ残しをやめても、思いやりを持った行動をしてみても、井戸を建ててもお金を積んでも学校を建てても小さな力で世界は変わらないこと、戦争も差別も苦しみも、消せないことも知っています。

夏休み中、現役大学生と話をする機会があったのですが、彼女が夢を決めるきっかけとなった人物がいたそうで、彼についての話が印象に残っています。彼は高2の夏フィリピンの村に行き、生活しました。生活を共にした家族の長女はとても賢い子で、村一番の秀才だったそうです。そしてその村には、村で一番かしこい子を無料で大学へ行かせられる

というルールがありました。当然少女は大学へ行くだろうと、皆も、少女自身も思っていました。しかし彼が日本へ帰る数日前、家が貧しく、長女として家族を養わなければならぬため、大学には行かないことに決ました。彼女が別れ際に『大学に行きたかった』と言ったのが忘れられなくて、自分の人生を全て捧げても彼女のような人を救いたい。」と思い、勉強し、東大に入ったそうです。よく聞くような話ではあります。もちろん彼の行動力には私も感動しました。でも一番感動したのは、この話を私にしてくれた女子大生が、彼の話に感動したことで自分の夢を見つけ、彼と同じ大学を目指す決心をし、大学生として私の前にいたことです。彼が人生を捧げることで何人の人が幸せになったのかはわかりません。相変わらず暗いニュースも苦しんでいる人々も減りません。でも彼が何かを変えようと思つて精一杯やったことが女子大生の世界を変えた事は確かです。「自分が夢に向かって勉強することで、世界をほんの少し変えられるかもしれない。そう思うと勉強すらも、壮大な計画みたいで楽しかった。」と言っていました。私達は世界を変えることはできません。でも何かを、誰かを変えることはできるのだと思います。変えられないことが、変えようとしない理由であつてはならないと思います。

日本人の私から見た世界

北海道留辺蘂高等学校 3年

十亀 遥

日本の私から見ると世の中にはボロボロな服を着ている人もいれば、服を買うことができない人もいる。みどりの野菜は手が入らないで食べることができない人もいる。イモや豆、とうきびが中心の食生活で栄養が偏り死んでしまう子どももいる。ボロボロの小屋のような場所に住んでいる人もいる。そのような家が密集しボコボコの汚い道のあることが普通だと思っている国がある。そして、トイレには鍵がかけられ使うだけでお金がかかる国もある。その国では、お金のない人たちはトイレを使うことができずにそこら辺で用を足すしかないのだ。そういった国は気温が高いことが多く、雨の日などはじめじめしている。そのじめじめした空気に臭さが加わり汚い道ができていくのだと思う。この状況は日本人にとってトイレでご飯を食べるのと同じことで絶対あり得ないことだ。そういった私達日本人から見ると、住みやすい環境とは思えない国が世界にはたくさんある。私達にとってそういった国は貧しい国だ。同じような認識をもつ日本人はたくさんいると思う。

私たちは、貧しい国々には裕福な国からの支援ボランティアが必要だと考える。ボランティアは困っている人を助けるとても良い活動だ。しかし、ボランティアを受ける側は必ずしもボランティアを受けることによって、幸せを感じているとは限らない。なぜなら、ボランティアを受ける人達の意見でボラン

ティアはされているわけではない。ボランティアをする側が自分の理想だけで良かれと思ってしているからだ。例えば、ボコボコの汚い道を日本人が環境に悪く改善した方が良いと考えコンクリートで道を作る作業を行っても、日本人のいるうちは汚くなることはない。しかし、日本人がいなくなってしまったらどうだろうか。コンクリートの存在意義を理解する人がいなくなった時にはもとの道路に戻ってしまう。つまり、日本人がよかれと思って自分の思った理想だけで支援しても、その現地の人たちの意識を変えなければその場所の環境は変わらないと思う。ボランティアは人のためにするものだが、ボランティアを受ける相手が必要を感じなければボランティアにはならないと思う。良かれと思ってやつていることが相手の側からしたら必要と感じていないこともある。ボランティアを実行する前に相手が本当に必要としていることは何か、相手を幸せにさせることは何かを考えることがボランティアにとって一番大切なことだと思う。

私は将来教員になりたいと思っている。そこで自主的に歳の違う人、外国人、様々な人と関わっている。そのなかで、楽しいこと・辛いことから多くの新しいことを発見し、自分の経験を生徒に伝えられるようになりたいと思っている。私自身、先生や大人から聞く話は興味を持って聞く。それは私よりもずっと長く人生を経験していて、私の知らないことをたくさん知っているからだ。また、そういった話の中には新しい発見がたくさんあり、発見できたことによって自分は成長することができた。これから関わる子どもたちにも私と同じ経験をしてほしいと考えている。

今回私は、世界のボランティアの話を聞き、世界

の様々な国によっての幸せは私達日本人の幸せと同じではないということを発見できた。この発見を私が教師になり早い段階で子ども達に伝えることができたら、その子ども達はボランティアに対しても、世界に対しても、より広い見方で見ることが出来ると思う。

未来に伝えるために、私自身が豊かな経験を増やすことがいま私がしたいことで出来ることだ。そのためにもいま、私は多くのことを経験し、多くの子ども達の心に響くように伝えられる力を身に付けていきたいと思う。

学 校 賞

特別学校賞

北海学園札幌高等学校、北海道札幌清田高等学校、札幌北斗高等学校、北海道札幌西高等学校

学校賞

函館ラ・サール中学校、旭川市立常盤中学校、七飯町立大沼中学校、札幌市立柏中学校、旭川市立愛宕中学校、石狩市立樽川中学校、江別市立大麻中学校、札幌光星中学校、更別村立更別中央中学校、武修館中学校、北海道函館陵北高等学校、北海道剣淵高等学校、北海道旭川東高等学校、函館ラ・サール高等学校、北海道旭川商業高等学校、北海道函館西高等学校、北海道当別高等学校、北海道滝川西高等学校

JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト2015のご案内

JICAでは今年度も、開発途上国と日本との関係について理解を深め、自分たちがどのように行動するかを考えることを目的として、中高生を対象とした国際協力エッセイを募集します。たくさんのご応募をお待ちしております。

【テーマ】

「世界を知ろう！考え方！」

—よりよい世界のため私たちにできること—

【募集期間】

2015年6月12日(金)～9月11日(金)

【応募先】

〒102-0082

東京都千代田区一番町23番地3 日本生命一番町ビル5階

(公社)青年海外協力協会内「JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト2015」係

TEL: 03-3556-5926(直通)

Eメール: jica.essay@joca.or.jp

URL: <http://www.jica.go.jp/hiroba/menu/essay/index.html>



写真提供:中原二郎/JICA

※JICA事業全般については、下記にお問い合わせください。

独立行政法人 国際協力機構(JICA)北海道国際センター

【札幌】

〒003-0026

札幌市白石区本通16丁目南4-25

TEL: 011-866-8333(代表)

URL: <http://www.jica.go.jp/sapporo/>

【帯広】

〒080-2470

帯広市西20条南6丁目1-2

TEL: 0155-35-1210(代表)

URL: <http://www.jica.go.jp/obihiro/>